

2019 合同企画展「焼き物からよむ平安時代」を通して (2) — 平安時代の文房具 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



灰釉陶器風字硯 平安宮陰陽寮跡出土



灰釉陶器円面硯 平安京右京二条三坊十五町跡出土

はじめに 令和元年度 京都市考古資料館・京都橘大学文学部歴史遺産学科考古学コース 合同企画展では「焼き物からよむ平安時代—発掘でみえてきた食器・酒造り・饗宴—」と題して、平安時代の焼き物を展示しました。このうち饗宴にスポットライトを当てたブースでは、文房具の一種である硯を展示しました。

考古資料からみた平安時代の文房具

考古資料としてのこの文房具には、筆・墨・紙・木簡・硯・水滴がありますが、このうち圧倒的にのりやすいものが今回展示した硯です。硯は固く表面がザラザラした材質である必要があるため、日本では飛鳥時代以来、焼き物製か石製が常に主流を占めてきました。これらは金属や木材に比べて腐朽したり再利用されたりするリ

スクが低いので結果的に現在までのこの確率が高くなります。

この硯は、平安時代までは基本的に須恵器製の1種類のみであったため、使用階層の差異を示すために多様な形状・大きさのものがつくられました。ところが平安時代になると石製・緑釉陶器製・灰釉陶器製・黒色土器製の硯が出現し、器質が多様化することがわかっています。それに反比例するかたちで硯の形状と大きさは単調になっていきます。このような変化は今回の展示でも示したとおりですが、食膳具でもほぼ同様の傾向がみられ、平安時代の焼き物の特質であるということがいえます。

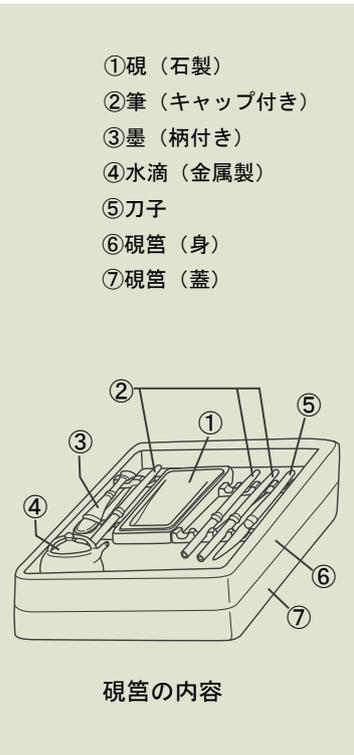
このように考古資料からは、かたちの変化や使用の有無など、文献史料からは得がたい平安時代の文房具像を知ることができます。

ただその一方で、使用のルールやセット関係などといった実態については考古資料からは明らかにすることが難しく、これらは文献史料をひもといていく必要があります。以下では、文献史料をもとにした平安時代の文房具像についてみていこうと思います。

文献史料からみた平安時代の文房具

まず、文房具の使用・供給の実態について見ていきます。

『延喜式』(927年成立) 卷第十五では、内宴(天皇が1月に内裏で主催する饗宴)に用いる物品として、革管と柳管を各1合(ともに硯管)、硯5口、紙2帖、筆20管、緑綿30屯を挙げており、革管、柳管、硯については饗宴が終わり次第、内蔵寮(皇室の財宝を管理する機関)に返納することが決められています。筆が消耗品である一



硯管の内容

『源氏物語絵巻』「夕霧」に描かれた硯管（原図を元に描画、出口絵理氏作図）

方で硯管と硯は皇族専用のものがありました。普段は倉庫に大切にしまっていることがわかり、饗宴における文房具の使用実態を知ることができます。

『朝野群載』卷六の長治元年（1104）9月29日「官宣旨」では、左弁官が尾張国にたいして猿頭硯（猿面硯）と瓶（水滴か）を20個ずつ進上することを命じています。その使用先として「外記結政（官司や諸国から出された議案を整理する機関）」と「陣頭（宮中の門を守る衛士の詰所周辺）」を挙げています。この史料からは、文房具が実際にどのような場所で使用されていたのか、あるいは文房具が各機関へどのように配布されていたのかを窺い知ることができます。

つぎに文房具の種類やセット関係について見ていきます。

『安祥寺伽藍縁起資財帳』貞観十三年（871）には、東寺の所蔵品と

して「稠桑紫石硯瓦1口」、「點硯水瓶子1口」を挙げています。前者は虢州（現在の中国河南省靈宝市）の石でつくられた虢州硯をさしています。別名を稠桑硯といい、石材は深紫色を呈しています。後者は水滴用の瓶子です。前述の史料でもそうでしたが当史料でも、消耗品でない硯と水滴のみが倉庫で一緒に保管されています。

『後二条師通記』寛治七年（1093）11月20日条には、除目（任官の儀式）において硯、筆2、墨、小刀、水滴が入っている柳管と、紙を用意したことが記されています。

まとめ 平安時代前期の『安祥寺伽藍縁起資財帳』では硯管はみられません。また、同じ平安時代前期から中期やそれ以前の時代の史料にも硯管は、ほぼみられません。この時期の文房具は硯管に納められることなく、それぞれ単体で存在していたことが一般的で

あったと想定されます。そしてこれは、奈良時代までの硯が大小あり定形の硯管が作られないこと、また共用が一般的であるため硯管が不必要であったことが要因にあると考えられます。

ところが平安時代後期の『後二条師通記』では、硯管のなかに硯・筆・墨・刀子・水滴（瓶）の文房具5点が必ずセット関係を保って納められるようになることが確認できます。これは『源氏物語絵巻』（1140年）など12世紀以降の絵巻に描かれた硯管からも明らかなことです。この11世紀末ころにおける文房具セット成立は、大きさが一定になり、個人使用が一般的になった硯が普及していったことも要因であると考えられますが、日記、随筆、物語の登場など、日本文学に大きな変革があったことも無視できないでしょう。

（京都橋大学大学院 中谷俊哉）